

## Special Essay

### ダ・ヴィンチの「最後の晚餐」鑑賞記に思う

医療センター外科

緒方 裕

2010年10月、3回目のミラノ訪問で初めてレオナルド・ダ・ヴィンチの「最後の晚餐」を鑑賞した。小説と映画「ダ・ヴィンチ・コード」の大ヒットで中々鑑賞の予約が取れないほどの人気である。お昼前にサンタ・マリア・デッレ・グラツィエ教会に到着し、12時15分から僅か15分間、敷地内のドメニコ修道院の食堂に描かれている壁画を観るスケジュールであった。一回に鑑賞できるのは25人と制限されている。前々室に展示してある資料をもとにガイドから作品についての解説を受け、さらに前室に移動し15分閉じ込められる。扉が開くと、その食堂がある。皆、一斉に壁画の方へと向かう。時間になると出口の扉が開くシステムとなっている。

名画とされるこの作品は、壁画でよく用いられたフレスコ技法ではなくテンペラ（顔料を卵、ニカワ、植物性油などで練った絵具）で描かれたためカビや絵具の退色等による傷みが激しく、さらに描かれた場所が修道院の食堂であったため湿気が酷く、絵画の損傷は想像以上であったらしい。1977年から1999年にかけて大規模な修復作業が行われた。1796年、ナポレオンが侵略した時には、なんとこの食堂を馬小屋にしたらしい。美術史上、最も偉大な作品の一つに数えられる「最後の晚餐」が一時は馬糞の臭いに悩まされていたとは驚きである。壁画だったため略奪から免れた。また、奇跡的に第二次世界大戦の戦火からも免れている。

ある修復家は20年以上の歳月をかけ、洗浄作業のみを行った。この修復で、一点透視法（遠近法）の消失点の釘跡（キリストの右のこめかみ）やキリストの口が開いていたことなどが新たに判明した。一点透視法により部屋の様子が立体的に描かれており、ある位置から見ると、絵画の天井の線と実際の壁と天井との境目がつながり、部屋が壁の奥方向へと広がって見えるよう描かれている。キリストの唇の開きは、「この中に裏切り者がいる」と告げた瞬間を描写し、12人の使徒（弟子）たちがどのような

反応を示したのか、その心象風景を感じ取ることができる。

最近、ある有名な女優の雑誌連載ものに「最後の晚餐」鑑賞記が載っていた。女優は、「もし、これがダ・ヴィンチの作品と知らなかったら、これほどの興味や関心を惹かれたらどうか？」と疑念を抱いたと振り返っている。同じ食堂の真向かいの壁には、同時期にモントルファーノが「キリストの磔刑」をフレスコ画で描いている。保存状態も良く、色彩も鮮やかであるが、無名のためその作品の前で足をとめる人はいなく、価値を比べてみようとさえすることなく、はなから素通りする人がほとんどであったと述べている。勿論、その女優を含めて、人間はなんとブランド力に左右されやすい生き物なのだろうと痛感せずにはいられない15分間であったと結んでいた。

大変違和感を抱く記事である。芸術品は、作者をはじめ作風、技法、歴史、公開性、そして何を感じさせてくれるか、などすべてが作品のもつ価値のはずである。決して「ブランド力」(安っぽい言葉でこれも気に入らない)などに左右されているのではなく、その価値を共有しようという強い意思が僅か15分間という短い鑑賞時間の中で表現された当然の行動と私には思える。個人の芸術品に対する鑑賞法や感想についてとやかく言うつもりは毛頭ないが、自分の中で価値観の醸成ができない人から観られる「最後の晚餐」が気の毒である。

